ロックマンエグゼTR

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロックマンエグゼＴＲ

【Ｎコード】
Ｎ０３８８Ｃ

【作者名】
謎沢

【あらすじ】
もうそろそろ小学校卒業時期である熱斗とロックマン。そこへ、ＦＭ星人が突如として現れる・・・。そして、スバルとウォーロックと出会う。そして、熱斗やスバルは、協力しながら、新たな敵たちとたたかうのであった。
７０，０００ｐｖ達成！！　これからもよろしくお願いします。

第1話　時は開かれる（前書き）

新たに、ペナルティとはまた違った世界を描いていきます。

どうぞよろしくお願いします。

第1話　時は開かれる

時空間を行き来すること・・・。
それは、人類が達成したい夢である。
そして、その夢がかなったとき、ある事態が人類にもたされようとは誰も知らなかった・・・。
それは、近未来に起きようとした。
その日は、もう、早春の時期・・・。
「もう卒業か、ロックマン。」
「そうだね、熱斗君。」
学校の帰り道、光熱斗とナビのロックマンは二人で話していた。
もう、季節は、早春である。
そして、熱斗は、四月から中学生になるのである。
熱斗は、ロックマンにあることを話した。
「そういえば、ロックマンとあってから、いろいろなことがあったなあ・・・。」
熱斗は、父、祐一郎からロックマンをもらったときのことから思い出した・・・。
熱斗とロックマンは、これまで、いろいろなことを経験してきた。ダークロイドや、ビヨンダートのナビを戦ってきた。そして、熱斗は今、ネットセーバーとなったのである。
そして、家に着いてしばらくすると、熱斗のことをロックマンがこうよんだ。
「熱斗君、誰からかは分からないけど、通信が入っているよ。」
熱斗は、誰かも分からずに、その通信を受け取った。
そして、それは、熱斗の知らない人物からだった。

一方、熱斗の世界からさらに二百年後・・・。
「ロックバスター。」

ウオー！！！

「くそ！！覚えていろ、ウォーロック！！」

電波空間で、電波変換した星川スバルと、ウォーロックがいつものようにＦＭ星人と戦っていた。

そして、そのＦＭ星人はどこかへと行ってしまった。

「やったなあ。スバル。」

それにスバルは、うなづいた。

そして、電波変換を解くと、スバルたちは家に戻った。

「また宿題か。スバル。」

ウォーロックはスバルにこう言った。

スバルは宿題をしていたのである。

ウォーロックは退屈で仕方なかった。

スバルはこのような少年だったのである。

さて、一体、熱斗とスバル。二百年の時を果てて、出会うことになるとはまだ、二人とも気がついていなかった。

しかし、時空移動は、あのＦＭ星人によって進められようとしていたのである。

第2話　未来への予言

熱斗はＰＥＴの通信に応答した。
「君が光　熱斗君だね？」
それに熱斗はうなづいた。そして、熱斗はそのおじさんに尋ねた。
「あなたは誰ですか？」
それに、おじさんはこう答えた。
「私は、時空間について詳しいものだ。いずれ、名を明かすことになるであろう。」
そして、その男は、こんな話をし始めた。
「これから、何日かの間に、未来からある生命体がやってくるだろう。そして、その生命体は、未来の兵器を使って、都市を攻撃してくるだろう。しかし、心配はいらない。その後、救世主が、現れるからだ。これは本当である。救世主はきっと君たちを助けてくれるだろう。」
それを言い終わった途端、通信がきれた。
「一体、今のはなんだったんだろうか。ロックマン。」
「僕にも・・・。」
熱斗は、その答えが見出せなかった。

その夜、このことを祐一郎に話した。
珍しく、テレビを見ながら、祐一郎は言った。
「そんなこと、起こるわけがないじゃないか、熱斗。今の時代にはそんなことが出来る機械だって存在しないしなあ。ああ、ビヨンダードならば、行けたけどね。」
熱斗は全然、相手にされなかった。

しかし、すでに、地球のある場所で起きようとしていた。いや、再び起きようとしていたのである。

未来のある場所では、スバルに敗れてしまった、ＦＭ星人が、なにやら機械を動かしていた。
「さて、これの電源を入れて、実験でもするか。」
その機械には、「時空移動装置」と書かれていたのだ。

それは、ＦＭ星人がやられて、ある場所に降り立ったときだった。
その場所に、この機械が落ちていたのであったのだ。

この機械には、物凄い強力な力が隠されていたのである。

第3話　時空とクレーター（前書き）

大変遅くなりました。第三話です。

第3話　時空とクレーター

それは誰も知らない場所にあった。
一面を永久凍土が覆い尽くしている。
その中に、一際大きなクレーターが存在した。
それが、その場所である。

しかし、このクレーターは皆の記憶から忘れ去られていた。
いや、あの時記憶が消されたのである。
それは、デューオの出現の時だった。
最後に、バレル大佐が、デューオと併合し、そして、デューオはどこかへと姿を消してしまった。
そして、熱斗たちの頭の中の記憶もいつの間にか消えてしまったのである。

クレーターの周りは静かだった。
しかし、そこへ、いきなり、強い光が発射されたのである。
それと同時に、ウェーブロードが熱斗たちの世界に展開されたのである。

そして、その情報が科学省に入ってきたのである。
「大変です！！光博士！！」
助手である名人が、祐一郎を呼んだ。
「どうした。」
祐一郎が返事をすると、名人はこう答えた。
「地球上に、電波を阻害する帯状のものが無数に展開されています。」
「なんだと！！」
祐一郎は驚いた。そんなことは初めてだったのである。

一方、未来では、ＦＭ星人たちが喜んでいた。
ＦＭ星人たちには、新たな道が開けたのだ。
ＦＭ星人たちが過去に行って、人間たちを支配できれば、この未来でも、地球を征服できるのだ。
つまり、歴史が変わるのである。
これほどＦＭ星人たちはうれしいことはなかった。

そして、ＦＭ星人たちは、過去へと向かったのであった。

第４話　平和の裏側に・・・

そして、過去では、ＦＭ星人たちが暴れまわって、町中を壊した。
熱斗は名人からある指令が出された。
それは、
「熱斗君、町中に出現している生命体を倒してくれ。」
ということだった。
「よし、行くぞロックマン。」
熱斗はロックマンにそう言って、チップをＰＥＴに入れた。
「シンクロチップ、スロットイン。クロスフージョン。」
熱斗はロックマンとクロスフージョンして、ＦＭ星人とたたかおうとした。
しかし、熱斗の攻撃はＦＭ星人には通用しなかった。
「攻撃が効かない。」
熱斗とロックマンが何もできない分かったとき、いきなりＦＭ星人たちが攻撃を仕掛けてきた。
それになすすべもなく、熱斗とロックマンの力はなくなって行った。
そして、熱斗とロックマンのクロスフージョンがとけてしまった。

その頃、スバルはいやな感覚に襲われていた。
ウォーロックは、別にスバルの考え過ぎだなんかとスバルに言った。
しかし、スバルは、ウォーロックと電波変換し、ウェーブロードを駆け抜けた。
そして、ある一角にスバルは足を止めた。
「別に、いいだろ。スバル。わざわざＦＭ星人探しをしなくたって・・・。」
しかし、スバルはやめなかった。まるで何かに操られているように・・・。
そして、スバルがその倉庫に入ると、そこには大きな機械と、ある

男の人が立っていた・・・。男は、スバルにこう話しかけた。
「君が星川スバル君だね。」
スバルはそれにうなづいた。そして、男は話しはじめた。
「実は、この機械を使って、過去でＦＭ星人たちが攻撃を仕掛けてきたんだ。そして、今、過去の人はなすすべもなくただ、ＦＭ星人に町を破壊されるのをじっと見ているしかないんだスバル君、このままだとこの未来でも、時代が変わってしまうかもしれないんだ。」
スバルはそれを聞いて過去へ行くことを即決した。
いや、スバルは過去の人たちを助けてあげたかったのである。
スバルとウォーロックはその機械を使って、過去へむかった・・・。

第５話　救世主現る！！（前書き）

読者数が１００人を越えました。これからもどうぞよろしく・・・。

第5話　救世主現る！！

熱斗は、地面に倒れてしまった。
「この反逆者め。所詮、我々、ＦＭ星人に勝てるとでも思ったのか。」
そして、そのＦＭ星人は、倒れている熱斗にさらにこう言った。
「お前を永遠に戦えなくしてやるよ。」
ＦＭ星人が熱斗にさらに攻撃を加えようとしたときだった。
「ロックバスター。」
ＦＭ星人の後ろからいきなり、ウォーロックとスバルが電波変換したロックマンが現れたのだ。
「くそ、なんて運が悪いんだ。」
そして、ＦＭ星人たちはロックマンを攻撃し始めた。
しかし、勝敗は決まっていた。
そう、ウォーロックたちがかったのである。
「くそ、なんでウォーロックなんかにやられなければ行けないんだ。」
ＦＭ星人たちはその場を立ち去った。
「大丈夫？」
スバルは熱斗に近づいた。「ああ、大丈夫さ。あっ、いててっ。」
熱斗は膝を抱えた。
「君の家まで送って行ってあげるよ。」
スバルは熱斗のことを気づかい、熱斗を家まで送って行ってあげることにしたのだった。
しかし、熱斗は科学省へ行きたかった。
それをスバルに伝えるとスバルは了解してくれた。
そして、二人は科学省へむかった。
「君の名前は。」

熱斗はスバルに聞いた。
「僕は星河スバル。よろしく。」
続いて熱斗も自己紹介をした。
「そういえば、スバル君はロックマンって行っていたよね。」
「うん。」
「一体、なんでロックマンなの。」
「それは・・・。」
スバルは困ってしまった。「ああっ。科学省が見えてきた。」
やっとの思いでか科学省に着いた。
「大丈夫か、熱斗。」
父、祐一郎は熱斗のことが心配だったのである。
そして、熱斗の様子を見てほっとしたのだった。
しかし、時空間では新たなことが起きようとしていた。

第6話　息子の死

「大変です。所長。」
とある世界の研究所でこんなやりとりがあった。
「どうしたのだ」
所長、そして、熱斗たちの前に現れたあの男は研究員にこう言った。
「今、時空間で異常変化が確認されました。」
そして、所長は研究員に原因究明を指示した。

その頃、研究所から離れた倉庫街の一角で男たちがある話をしていた。
「まさか、こんないいことができるとは思ってもいませんでしたよ。」
「ああ、時空間を操作して、歴史を書き換えるだけでなガッポリ貰えるんだからな。」
そう、時空間の異常変化は彼らのせいだったのだ。
しかし、未来ではこんなことは日常茶飯事だった。
しかし、今回の変化が予想以上の変化をしていることにこのふたりは気付かなかったのである。
そして、状況は悪化の一途をたどっていた。
「このままだと、時空間で爆発が起こり、異世界と異世界同士がつなかりあうはか、見知らぬ巨大生物を生み出してしまうかも知れません。どうしますか、田井さん。息子さんもこのままだと巻き込まれてしまうかも知れませんよ。
所長の田井は黙ってしまった。息子の祐太はまだ小学校5年生ながら、タイムパトロールのメンバーなのだ。
息子を思いやるとどうしても回避しなくてはならなかった。しかし、時空間ではもう耐えきれなくなっていた。いつ爆発してもおかしくない状況だったのだ。

そして、運悪く、田井祐太はパトロールをしていた。
祐太が異世界から戻って来ようとして、時空間の中にいたその時、一気に時空間が大きな音とともに爆発したのだ。
「所長、今、時空間が大きな音とともに爆発した模様です。今、時空間の状況が不明になりました。」
「やっぱり、抑えられなかったか。パトロール隊員の所在は・・・。」
所員は口をつぐんでしまった。
モニターには爆発直前の隊員の所在が映し出されていた。
そして、祐太の所在を田井が見た時、田井は息をするのさえ忘れていた。
それだけ、田井のショックは大きかったのであった。

第7話　新たな世界（ワールド）

科学省では、祐一郎がスバルから未来で起きたことについて話を聞いていた。
その途中だった。いきなり、モニターを監視していた研究員が祐一郎を呼んだ。「大変です。いきなり、謎の現象が世界中で発生しました。」
「なんだって。」
祐一郎や熱斗たちはモニターを見た。そして、モニターには大陸がいろいろなところに移動したり、あらたな場所が出現したりしていた。
その最中、科学省に一本の通信が入った。
モニターの前で操作していた名人は祐一郎に通信が入ったことを言って、その通信をモニターに転送した。そして、モニターに映し出されたのは、今まで見たことのない生命体だった。
その生命体はモニターの前にいる全員に言った。
「今、我々の生命体は誕生した。我々は多くの生物のいいところを吸収し、そして、生物を吸収し、強大な力を持った。
そして、我々、タイム怪物（モンスター）は近く、生物を配下に収め、強大な文明を築くのである。
我々に反抗すれば、お前たちなんか、たちどころに潰すことができるんだぞ。
さあ、お前たちは反抗するのか。これが最初で最後のチャンスだ。反抗すれば、お前たちを消滅させよう」それに熱斗はこう言った。
「お前たちを倒さなければ、何もかもが崩れてしまう。お前たちの思い通りには絶対、させない。」
それを聞いたタイム怪物（モンスター）はこう言った。
「お前たちの回答を聞いた。後で後悔しても知らぬぞ。」
そして、通信は切れた。

祐一郎は熱斗にこう言った。
「新しいシステムを考えついた。熱斗、お前たちにこの力があれば、お前たちはきっと勝てるはずだ。後はスバルたちと協力をして守って欲しい。あと、スバル君、ちょっと協力してほしいのだが・・・。」
「いいですよ。」
スバルはそう返事を返した。
そして、祐一郎は言った。
「じゃあ、そのウエーブトランサーを貸してくれないか？」
さすがに、スバルには、これを貸すわけには行かなかった。なぜなら、この中にウオーロックがいるのだから・・・。
「俺なら、どっか行っちまうぜ。」
ウォーロックはそう言った。今は、この世の中にもウエーブロードがある。
そして、急ピッチで祐一郎は開発を始めたのだった。

第8話　平和の裏で・・・

祐一郎は、開発に数日かかるからと、スバルに熱斗と一緒に学校に行くように勧めた。

そして、次の日。
「熱斗君、朝だよ。早く起きて。」
いつもとは違う声に熱斗に目を覚ました。
「ロックマン？」
熱斗は寝ぼけてながらこう言った。
「何、熱斗君。」
その声を聞いた熱斗はスバルが自分を起こしてくれたことに気が付いた。
しかし、スバルの機嫌はちょっと悪くなってしまった。
そして、二人は朝食を済ませ、学校にむかった。

「熱斗が珍しく、遅刻してない。」
途中、メイルちゃんやデカオたちと合流して、こんなことを言われ、その度に熱斗はスバルのことを紹介した。

「そう言えば、熱斗って、よく、転校生となんか関わっているよね。」
メイルちゃんは熱斗にこんなことを言った。
「そう言われればそうだね。」
熱斗は前、少しだけかょってた、アイリスのことを思いだした。
そんなことを考えていると、いつのまにか学校の前に着いていた。

「はい、皆さん、今日、このクラスに転校生が来ました。」
担任のまり子先生はスバルのことをまだ知らない人に紹介した。

そして、スバルは先生の指示によって、熱斗の隣に座った。

一方、その頃、タイム怪物(モンスター)たちはある場所に召集されていた。そして、キングモンを中心とした会議が始まった。

「これから、第一回、戦略会議を始める。」

会議の議題は熱斗とスバルたちをどう倒すかという議題だった。

まず、熱斗とスバルに関係する出来事をしらべたものを紹介した。

そして、熱斗とスバルたちには油断は禁物ではないかという意見が出された。

一方、別に大丈夫だろうという意見も出た。

そのやりとりを聞いていたキングモンはこう言った。「我々はこれから、地球、全領土を支配するのだ。あんな二人に手こずっているようならば、地球を支配することなどとても無理である。」

そして、キングモンはあるタイム怪物(モンスター)に使命を託したのだった。

第9話　真夏大作戦！！

「ここが秋原町か・・・。」
秋原町に着いたタイム怪物(モンスター)はこう言った。
名は、ファイアモン。周りの気温を上げたりできる。そして、ファイアモンが路地裏を探し始めた。

一方、学校が終わり、帰宅中である熱斗とスバルはこんなことを話していた。
「本当に、今日は暑くて、このままだと倒れちゃいそうだ・・・。」
熱斗はとても無理そうな顔をした。
「そんな、大袈裟だよ、熱斗君。」
ロックマンはそう言った。スバルもそう思っていた。だいたい、サラリーマンは長袖、長ズボンではないか・・・。
「しかし、3月だって言うのに、物凄く暑いよね・・・。」
スバルはそう言った。
「確かにおかしいなあ・・・。このところ。これも、時空間のせいなのかな。ああ、こんなことにならなければ良かったのに・・・。」
熱斗はそう返事をした。
「でも、熱斗と会えて良かった。熱斗といるとおもしろいことがあるからね。」熱斗はそのスバルの発言に怒った。
しかし、喧嘩するほどなかがよいだった。
たまには、二人ともいい刺激になっただろうと思う。そして、家に着いて、ちょっとテレビを見ていた。
テレビでは、今日の天気について話していた。
「なんと、今日は今になっても、温度が上がっています。」
その内容に熱斗とスバルは驚いた。
いくらなんでも、そんなことはあり得ない。

これは科学省でも、調査していた。
「何かの異常ですかね、光博士。」
裕一郎が調査している横で名人は聞いた。
「いや、何故か、秋原町の周りだけ気温が上昇している。しかも、秋原町のある地点を中心に・・・。
もしかすると何かの生物が周りを暑くしているのかもしれない。」
その祐一郎の発言に名人はタイム怪物（モンスター）が頭をよぎった。
そして、すぐに熱斗たちにその地点に急行してもらった。
そして、熱斗たちは祐一郎の予想通り、タイム怪物（モンスター）を発見したのだった。
「名人さん、ディメンショナルエリアを。」
展開されたディメンショナルエリアのなかで熱斗とロックマンはクロスフュージョンしたのだった。

第１０話　ファイアモンとの戦い

熱斗たちは、戦い始めた。しかし、熱斗は不安だった。自分の力ではタイム怪物（モンスター）には戦えないと。
それは名人たちにも分かっていた。ただ、今は少しだけでも進行をとめなくてはならなかった。
そして、名人はさらに助っ人を科学省に呼んだ。
そう、助っ人として呼んだのは、あの炎山だったのである。

その頃、やはり予想通り、相手は熱斗があいてにできる程のではなかった。
ただ、今はスバルは戦えない。
熱斗とロックマンはファイアモンのとてつもない攻撃を受けるだけしか出来なかった。

その頃、科学省の祐一郎も急いでいた。
このままだと熱斗とロックマンはやられてしまう。
そして、ちょうど、科学省に炎山が呼ばれて来たとき、完成した。
「炎山くん、これらを早く熱斗とスバル君たちに渡してくれ。」
祐一郎はそう言って、新しいチップとスバルのウェーブトランサー、そして、やはり、新しいカードを渡した。
炎山は急いで、熱斗たちのところへむかった。

炎山は急いで向かったが、ディメンショナルエリアが行く手を阻んだ。
その時、炎山は自分にもあのチップが渡されていることを思いだした。
そして、炎山はそのチップをＰＥＴに入れた。
「電波移動、シンクロチップ、ダブルスロットイン！！」

そして、炎山はディメンショナルエリアを通り抜けたのだ。
炎山は急いで、スバルのところへ再び向かった。
そして、炎山はスバルにもウェーブトランサーとカードを渡し、スバルにちょっと説明した。
スバルに渡された新しいカードはウォーロックとクロスフージョン出来るものだったのだ。
そして、炎山とスバルはクロスフージョンをした。
当然、すでにウォーロックはウェーブトランサーの中にいたのである。
そして、炎山、スバル、熱斗たちの形成が逆転しはじめたのだった。

第１１話　炎山の活躍

「来たぞ、熱斗！！」
後少しで、やられてしまいそうだった熱斗とロックマンの前に、炎山がきた。そして、炎山とスバルたちは、戦いに参戦し、熱斗は後ろへ引きさがった。

「今度は俺たちが相手だ。」
炎山はファイアモンにそう言った。
「どうせ、お前たちなんか、あいつと同じで、すぐに俺さまにやられてしまうんだろ。」
「それはどうかな？」
炎山はファイアモンに攻撃をした。
「なに！！」
ファイアモンは声を上げた。
なんと、炎山の攻撃が効いたのだ。
「くそ、お前らを倒してやる！」
ファイアモンは炎山やスバルに攻撃を仕掛けた。
しかしながら、炎山やスバルは目にも止まらぬ速さで移動した。
その技に熱斗は驚いていた。
これが新しいチップ、電波クロスフュージョンの効果だった。
電波クロスフュージョンでは、クロスフュージョン時に、シンクロチップと、電波系のチップを挿入しておくと、電波変換で使える、瞬間移動のほかに、攻撃も、電波として伝えることが出来るのだ。

ファイアモンには、猶予はなかった。
炎山や、スバルの攻撃は次々と当り、ファイアモンのダメージは増大した。

そして、炎山とスバルはファイアモンを倒した。
「大丈夫か、熱斗。」
炎山は、熱斗に声を掛けた。
「大丈夫だよ。」
熱斗はむっとした顔で炎山に返事を返した。

熱斗は炎山にまでタイム怪物（モンスター）がを倒してしまえるのが、歯がゆかったのである。

そして、炎山は祐一郎から預かったチップを渡した。
炎山が説明をしょうとしたが熱斗はそれを無視した。
炎山が熱斗の心情に気が付いて、炎山は去っていった。
そして、スバルも熱斗に声を掛けて、一緒に帰ろうと言った。
二人は現場を後にして、家に帰った。
もう、空には沢山の星が輝いていた。

第１２話　さよなら、秋原町・・・。

次の日・・・。

その日は、卒業式だった。

短いながらも、スバルと熱斗はともに卒業するのである。

「これから、第１０１回、秋原小学校、卒業式を挙行する。」

校長の重苦しい開式宣言が終わり、卒業証書が次々と渡される。

そして、ついに熱斗の番がきた。

「光熱斗！！」

「はい！！」

熱斗は少し緊張しながらも証書を受け取った。

次に、スバルも卒業証書を受け取った。

卒業証書を受け取った後も、いろいろな祝辞だのが発表されていた。

その頃、科学省では、急いである会議が行われていた。

それは、熱斗たちを第一次タイム怪物（モンスター）討伐隊として派遣しようというものだった。

最初に会議の初めに、貴船長官はこう言った。

「今、この地球は、非常に不安定な状況にある。また、それ以上に不安なのは、タイム怪物（モンスター）による、文明崩壊だ。文明が崩壊すれば、とんでもないことになる。」

そして、審議が始まった。しかし、もうすでに、参加者の心の中

では、派遣という答えが決まっていた。
審議の結果は、すぐに決まり、祐一郎が、伝えに行くこととなった。
ちょうど終わる頃、祐一郎は、学校へ到着した。
そして、熱斗や、スバルたちを呼び止めた。横には、メイルたちがいた。
「パパ、間に合ったね・・・。」
「ああ、ところで、スバル、熱斗たちに伝えたいことがある。さっき、貴船長官たちと話し合って、熱斗たちにタイムモンスターを討伐してもらうこととなった。これからは、いろいろなところへと行って、タイムモンスターたちと戦ってもらうことになる・・・。」
その話に、メイルは衝撃を受けた。
その後、熱斗やメイルたちは家に帰った。
熱斗とスバルたちは、準備をしはじめていた。そして、メイルと、ロールも、悩んでいた。
「このままで、いいの、メイルちゃん。このままだと、熱斗とはなれちゃうよ。」
それに、メイルの心は、だんだんと、熱斗についていくという選択に強くなっていった。
そして、その話は、秋原中学校の、熱斗たちの担任である、上里先生にも伝わっていた。
上里先生は、考えた。
～このまま、私たちの教え子となる二人を、カーバーしなくて良いのだろうか。いや、それはよくない。～
そして、次の日・・・。
「気をつけてなあ、熱斗、スバル君。」
祐一郎は、そのように声をかけた。
そして、熱斗たちは、秋原町を後にしようとしていた。

「熱斗！！」
「熱斗君！！」
熱斗が後ろを振り向くと、そこには、メイルと、あと見知らぬ男がいるではないか・・・。
そして、メイルと男が追いつくと、二人同時に言った。
「一緒に連れて行ってくれ！！」
メイルと男が言うので、熱斗はこう言った。
「あなたは、誰？」
それに、男は答えた。
「僕は、上里　厚志（こうし）、君のクラスの担任だ！！」
それに、熱斗は驚いた。まさか、中学の担任とは・・・。
しかし、これから、追い返すわけにはいかなかった。
二人とも、一緒についてきてもらうしかなかった。
そして、正式に、熱斗たちのタイムモンスター討伐隊は動き始めたのであった。

第13話　集落と・・・

秋原町を出ると、そこには、砂漠が広がっていた・・・。
「まるで、アフリカのようだな・・・。」
その光景に驚いた上里先生。しかし、熱斗やメイルにはビヨンダードのように見えた。

しばらくしていると、ある集落が見えた。
しかし、集落の様子がおかしかった。
熱斗たちは急いで集落へと向かった・・・。

集落内は、何かに破壊されたようだった。そして、ふと下をみると、そこには、死人と、その中にうずもれている人がいた。
「まるで、なんかのゲームの世界だなあ・・・。」
上里先生がそう言った。しかし、それにだれも反応しなかった。
それよりも、その人に状況を聞くほうが先決だった。
「一体、この町で何が起きたんですか。」
スバルは、何とか負傷だけで済んだ人に話を聞いてみた。
その人は、震えながらこう言った。
「何か、でかい怪物が・・・。」
怪物？　熱斗たちには、それがタイム怪物（モンスター）によるものだと感じた。
「で、その怪物は、どこへ？」
熱斗は、タイムモンスターの行方を聞いた。
「さあ、しかし、まだ近くにいるとは思います。」
「ありがとう。」
そして、熱斗は走り始めた。それをスバルやメイルが追いかけてきた。
しばらくすると、木が倒れているところがあった。
間違いなく、モンスターが通ったところだ。

熱斗は、その木を押しのけながら、後を追った。

そして、何かが見えてきた。

「あれは・・・。」

熱斗とスバルは秋原町で見たのとは違うタイムモンスターを見た。

「よし、いくぞ！！ロックマン。」

「うん。」

そして、熱斗とロックマンは電波クロスフュージョンをした。

続いて、スバルとウォーロックも電波変換した。

それをメイルと上里先生は眺めているしかなかった。

そして、タイムモンスターは熱斗たちの存在を知ると、いきなり襲い掛かってきた・・・。

どうなる、熱斗、スバル！！

第１３話　集落と・・・（後書き）

＝お知らせ＝

現在、エグゼＧＸ（相互リンクサイト）サーバーの停止によって、エグゼＧＸで募集を行った、タイムモンスターの設定が確認できなくなっています。

なお、次回の部分には、出すため、日程がずれる恐れがあります。

あらかじめご了承ください。

＝追記＝

エグゼＧＸの復活により、通常通り更新をいたします。

第１４話　流行の狭間・・・。

「ロックバスター！！」
熱斗とロックマンが打ったロックバスターだったが、さすがに、サイのような体格のタイム怪物（モンスター）には、痛くも痒くもなかった。
そして、タイム怪物（モンスター）は、熱斗とロックマンのところへ、突進をしてきたのだ。
「うお！！」
熱斗とロックマンは、後ろへと飛ばされていった。
一方、スバルとウォーロックたちにも緊張が走った。
しかし、ここで飛ばされるわけにはいかない。
スバルは考えた。
～さっきのような、体にあてるのは、硬い体に、ガードされる。ならば・・・。
そして、スバルはあるカードをプレゼーションした。
その攻撃は、相手に効くわけがないと思われた。しかし、相手に利いたのだ。
スバルは、電気系のカードを使ったのだ。
電気系ならば、電気は体を伝わっていくというわけだ。
そして、そのタイムモンスター、アルマゲドス・ホーンは、どこかへと去ってしまった。

一方、デストロイアッパーによって、飛ばされた熱斗は、森の中をさまよっていた。
崖に突き当たると、そこには、洞窟があった。
そして、おもむろに、中に入ると、そこには、大量の卵があった。
しかも、今まで見たことのない卵であった。
そう、それは、タイムモンスターの卵であった。
しかし、なぜ、こんなところにあるのだろうか？

熱斗が不思議がっているところに、一人の少年がやってきた。
「あっ、横取りするな！！」
熱斗はいきなり、後ろから少年にはかいじめにされた。
「いや、僕は、採ろうとはしてないよ。」
「じゃあ、なぜ、こんなところにいる。」
「森から出られなくなっちゃたんだ。」
熱斗がわけを話すと、少年は、熱斗を放した。
「君の名前は？」
熱斗が少年の名前を聞いた。
「順太だ。」

そして、熱斗は、順太からあることを聞いた。
それは、最近、子供たちの間で、ひそかにタイムモンスターを育てるということが流行しているということだった・・・。
熱斗は、順太に案内され、林道へと出た。
そして、熱斗は急いで、スバルたちのところへと戻るのであった。

第１５話　計画・・・。

熱斗の話を聞いた、スバルたちは、驚いた。
まさか、そんなに流行っているとは・・・。

そのころ、ある町のブローカーも動き始めていた。
そう、タイムモンスターを商品化しようとしているのだ。
これこそ、本当のモンスターゲームというわけだ。

しかし、そのブローカーさえも、タイムモンスターの恐怖を知らなかった。いや、これは、作戦なのである。

そう、それは、ある会議のときだった。
「あれっ。一部の怪物が集まっていないじゃないか。」
なぜか、会議に出席しないタイムモンスターがいたのである。
そして、原因調査をしはじめた。そこで分かったのが、「一部のタイムモンスターがなんと人間に飼われている」ということだった。

そして、キングモンは思いついた。それは、ひそかに人間たちの中に入り、人間たちをタイムモンスター化する計画だった。
そして、キングモンの頼みで、薬をダイチモンに作らせた。
ダイチモンは、薬を作るのが得意なのである。

薬は、できた。
そして、この作戦は、実行されはじめたのである。

この作戦に、熱斗たちは困っていた。なぜなら、タイムモンスターを取り上げることができなかったからである。
何もできずに、次の町に進む途中で、夜を迎えた。

「今日は、ここにとまろう。多分、これ以上、進むのは危険だろう。」
上里先生はそうスバルたちに言った。
そして、今日は、ここで寝ることとなった。
「そういえば、寝袋とか持ってきた？」
熱斗はスバルに聞いた。
「ああ。寝袋、二つしかないよ・・・。」
「俺は、持ってきたから大丈夫だ。」
上里先生はそう言った。あとは、メイルだけだが、メイルは、寝袋を持っていなかった。
「じゃあ、貸すよ・・・。」
熱斗は、そう言って、寝袋をとられてしまったのである。
続く・・・。

第１６話　死人の森

そして、夜、スバルは、熱斗に話しかけた。
「あの子達も、僕のような感じなんだろうなあ・・・。」
「それはどういうこと？」
熱斗は、スバルの発言にこう発言した。
「ウォーロックは、ＦＭ星人だって言う話、したよね。そう。ウォーロックとの出会いも、あの子達と同じだと思ったんだ。」
なぜ、こんなことをスバルが言うのかが、熱斗には分からなかった。

次の日、熱斗たちは再び次の町へと歩きだした。
そして、少し歩いていたとき、不意に熱斗たちの体が重くなった。
そして、熱斗たちはその場で倒れこんでしまった・・・。

熱斗が気づくと、そこは、森の中だった。周りに、スバルたちの姿はなかった。
その代わりといっては何だが、少年が一人いた。
「目を覚ましたか。」
少年は熱斗に声をかけた。
「うん。ところで、ここは、」
熱斗が聞くと、少年は驚いた顔をした。
「なんだい、君はここを知らないのかい。ここは、この地区では恐れられている場所だというのに・・・。」
そして、少年は言った。
「ここは、死人の森さ。昔、危機が起きた時に、人々が逃げた森なのだが、その人たちは皆死んでしまった。その霊がこの森に出るといわれている。」
そして、少年は駈け出した。

「こんな不気味なところにいたってしょうがない。近くにある僕のテントにおいでよ。」
熱斗と少年は、少年のテントへと向かった。
「そういえば、僕の周りに、ほかにはいなかった？」
少年に聞くと、少年は、こう答えた。
「あんな森に近づく人なんかいないだろ。大体、あの森では、子供とお母さんがいなくなっているんだし・・・。」
その少年の話に熱斗は、ちょっと気がかりだった・・・。

一体、スバルたちはどこへと行ってしまったのだろうか・・・。

第１６話　死人の森（後書き）

お知らせ

現在、更新速度が大変遅くなっています。ご迷惑をおかけします。

第17話　軍事王国

「ヘクション。」
熱斗はくしゃみをした。
「大丈夫か。はい。」
少年は、熱斗にミルクを持ってきた。
「ありがとう。」
そして、少年は言った。
「あしたにでもここを離れるか。」
「一体、どういうこと。僕、まだ、仲間を探し出せていないし・・・。君はここに住んでいるんじゃ・・・。」
「いや、僕は、国から追いかけてられているんだ。それに、多分、君の探している仲間は、ここにはいない。伝説では、森からある遺跡に飛ばされたというううわさもあるしね・・・。」
少年の言葉に、熱斗は驚いた。少年は話を続けた。
「この世界は、もうだめなんだ。何もかもが。」
「それって、どういうこと。」
熱斗が少年に聞いた。
「僕は実は、兵役で宇宙へ行っている年なんだ。」
「宇宙?」
熱斗は空を見上げた。
「ああ、今、世界は、宇宙と、地上で紛争を起こしている。」
熱斗は少し驚いた。そして言った。
「しかし、なんで逃げ出したの。」
「それは、僕を国は殺そうとしたからだよ。」
それに熱斗はさらに驚いた。
そして、少年は、さらに話を続けた。
「この国では、子供が生まれて、そして、小学校5年のときに、兵軍学校というところで、男子はある試験を受ける。それは、軍隊入

団。男なら、誰もが逃げられないものだった。そこでは、体力・病気診断を行った。ここまでは普通なのだが・・・」
少年は泣き始めた。熱斗は、少年を抱いた。
「大丈夫。俺と一緒に行こう。」
それに少年はうなづいた。すこしたった頃、まだ少年は口を開いた。
「僕は、友達をなくした。なぜなら、その試験に合格できなかったものは、夢の国というところに連れて行かされる。そして、そこで厳しい労働が待っているんだ。食事ももらえずに、ただ一日中、働かされる。そして、皆だんだん力がなくなり、亡くなっていくんだ。」
「そうなのか。」
熱斗は話を聞き終わると、少し黙ってしまった。
「この国によって、少年たちが困ったことになっている。助けなくちゃ。」
そういう心が芽生え始めた。それと同時に夜が明けようとしていた。

第１８話　移動と逃避

そして、朝が来た。熱斗は、朝から、少年と一緒にテントを片付けたりしていた。
少年が言った。
「僕は、一人でも大丈夫だ。別について来なくても・・・」
「いや、別にいいよ。国の人がかわいそうだから。」
熱斗はそう少年に答えた。
そして、熱斗と少年はその場所を後にしようとしていた。
「忘れ物はないな。」
少年はあたりをみまわして、自分のものが落ちていないか確認をした。
「そういえば、自己紹介、まだだったね。僕は、順平。」
「俺は熱斗。」
そして、順平と熱斗はそこを後にした。
「昨日はありがとう。」
順平は言った。
「いや。僕のほうこそありがとう」
と、熱斗は返事をした。
「そういえば、それ何？」
順平は、熱斗のＰＥＴを指差した。
「ああ、これはＰＥＴって言って・・・」
「こんにちは、順平君。」
ＰＥＴからの声に順平はびっくりした。
「だめじゃないか。ロックマン。」
熱斗は、ロックマンを怒った。
「そういえば、もしかして、これと同じ？」
順平は、持っていた機械を取り出した。それはビヨンダードでみた機械に似ていた。そして、中から声がした。

「順平、おいらを呼んだか。」
それはまさしくナビの声だった。
「いいや。新しい友達ができたからさ。」
「なんだ。また友達を作ったのか。でも、友達なんていらないじゃないか。また、国に捕まって、殺されてしまうのが落ちだ。」
そういうと、ナビは、応答しなくなった。
「まったくもう。」
順平はあきれた顔をした。
「そういえば、順平はどこに向かっているんだい。」
「それは、第二の都市、カスパさ。」
「順平はそんなところ行って大丈夫なのか?」
熱斗の問に、順平はうなずいた。そして、地平線のかなたから町が見えてきた。
それがカスパだった。これから一体どんなことがおこるのであろうか。

第１９話　遺跡の中で・・・

カスパの町の前には、検問があった。
「あれ、こんなところに検問なってあったかな。」
そんなことをいるうちに、検問所の職員がきた。
「そこの少年。ちょっと。」
それは熱斗にかけられたものだった。
「あっ。」
順平が気づいた時には遅かった。
順平は、変装していたので、なんとか捕まらなかったか、背も少し高い熱斗は、あっけなく職員に連れて行かれてしまった。

ところでスバルと上里先生は、どこへ行ってしまったのだろうか。
スバルたちはある遺跡の中にいた。
そして、二人は気がついた。
「いたた。ここはどこだ。」
上里先生はあたりを見回して、驚いた。まず、さっきいた森ではなかった。
「ほ、骨が。」
スバルが振り向くとそこには、白骨化した遺体があった。
「うわっ」
スバルもその光景に思わず、目を閉じた。しかし、すぐに目をあけた。いや、あけなければ物事が解決しないようにおもえたのだ。
「どうやら、昔の人ではないようだ。」
上里先生はいった。服装が現代人そっくりだった。
「じゃあ、一体。」
その時だった。
「誰かそこにいるのか。」
その声にスバルたちはあわてて、入り口を通り抜けた。

「そこで何をやっていたんだ。」
その声はおじいさんだった。
「はあ。」
上里先生はため息をついた。スバルはおじいさんに答えた。
「実は、道に迷って、ここにたどり着いたんです。」
その答えにおじさんは笑った。
「ははは。気をつけないと、この遺跡に長時間いると、有害な成分によって、体が動かなくなってしまうぞ。」
そして、3人は遺跡を出た。
歩いているとおじさんが言った。
「そういえば、君たちは旅人かね。」
それにスバルはうなづいた。
「そうか、大の男が二人歩いていては大変だ。なんせ、この国は今、男の大人は、研究者以外、皆、軍地へ行っている。」
「それってどういうことですか。」
スバルはそう聞いた。

第２０話　昭二

「私は、カスパという町の研究者で、昭二って言うんだ。そういえば、自己紹介、わすれっとったわ。ははは。ところで、おぬしたちは、一体、どこから来たんだ。まあ、そんなことを聞く必要はない。この世界が今、戦場と化している。しかも、北から南までだ。さらには、今、宇宙からも攻撃を仕掛けられている。」
その話にスバルたちは唖然となった。
「そういえば、君たちはもう、軍に入団しなければいけない年齢と同じだ。私が、研究者としてかばってあげよう。」
そして、歩いていると町が見えた。
「あそこか、カスパだよ。」
その町の前には、あの検問所が待ち構えていた。
「そいつらは、誰だ。」
それに、昭二が答えた。
「私の研究を見たいと言った別の町の研究者だよ。別に危険な人物ではない。」
それに警備員は3人を中に通した。
カスパの町は栄えていた。中では、威勢のいいおばさんやおじさんが商品を売っていた。
「ここが私の屋敷だ。」
昭二が案内した家は、豪邸とまではいわないが、カスパの町の中では一際大きかった。
家の中に入ると、昭二は言った。
「そういえば、まだ、全部を話終わっていなかったな。」
昭二は、堰を切ったようにまた話をし始めた。
「さっきの検問所みたいに、この国は、防犯に厳しい。いや。他の国もこのくらい厳しいがな。君たちはこんなに厳しい警戒を見たことはないだろう。君たちは別の空間からきたのだからな。」

それにスバルたちは驚いた。
「なぜ、そのことを分かったのですか。」
それに昭二は言った。
「あそこの遺跡には、昔、別の空間から来たという人が何度も降り立ったという記録があるのじゃ。だから、あそこの遺跡は、今でも、国の人たちに神聖な場所とされているのだよ。」
そして、昭二は世界で起こっていることに話を戻した。

第２１話　捕虜・・・。

「最初に始めたのは、誰だかわからないのだが、この戦争は複雑怪奇である。途中から宇宙人がやってきて、この地球を攻撃したのだ。しかも、その直前には、殺し屋集団が世界を駆け回るようになった。このままでは、この空間はなくなってしまうだろ。現在だってそうだ。少年たちまでもが、軍に行ってしまい、子供がなかなか生まれなくなった。国は、少年たちから、精子をもらい、それを人工繁殖しているが、今は、皆が生きるのに必死で、子供など作っている余裕などない。だから、さらに子供が減っているのである。」
その場の空気は静まり返った。この国の直面する危機にスバルたちは何もいえなかった。
そのころ、熱斗は町の警察機関に捕まっていた。
「危なかった。もしも反乱や強盗を起こされたらたまったもんじゃない。」
警官は熱斗にはき捨てるように言った。
「さて、じゃあ、軍人権検査センターに送る準備ができたようだ。おい。こっちへ来い。」
そして、熱斗は黒いバンに乗せられ、軍人権検査センターに連れて行かれた。
軍人権検査センターは3階建てで、ちょっと古かった。今の日本で言うなら、昭和５０年制と言ったほうが分かりやすいかもしれない。鉄筋コンクリート造り、外壁には茶色いタイルが貼られたビルだ。
そして、担当の職員は言った。
「すいませんが、ここに書いている用紙の順番でこれから、私と一緒にまわっていきます。」
そして、熱斗と職員は、暗い廊下を歩いていった。
廊下の突き当たりには、体育館みたいなところがあった。まず、測ったのは、身長・体重（重くちゃぁ、乗せられないもんな）・座高

（高すぎちゃぁ、乗れないもんな）・視力だった。
「では、身体能力行きますか。」
そして、腹筋・反復・短距離など、基本的な能力を測って行った。

第２２話　実験台として

熱斗たちはなんとか基本的な能力は測り終わった。
そして、次の日、結果が出た。
「すべての項目が出来ていますね。」
職員は熱斗にそう言った。しかし、このときはまだ平和だった。
そして、熱斗はカスパの町にある。役所の軍事課の課長のところへ連れて行かされた。
課長は言った。
「君を処罰する気は私にはないのだが、国からじきじきの命令があって、処罰を下さなければならない。前はこんなことなどなかったのに。」
そして、課長は言った。
「国からの罰則として、隣町ヒムラの科学施設にて、実験台として罪を償うこと。」
それを読み終わったあとの課長の顔は泣きそうだった。そして、熱斗にその令状が渡された。
「ごめんな。」
課長は熱斗に言った。熱斗の心の中には国への怒りと課長への悲しさが混ざった。
熱斗は言いたかった。しかし、この状況で言えるはずがなかった。
課長は努力してくれたように思えた。しかし、こんな結果になってしまったのだと熱斗は認識した。
そして、熱斗が発言をしないうちにまた黒いバンに乗せられ、カスパを後にした。

「熱斗どうしたんだろう。」
スバルたちは日々の生活の中でそう思っていた。
そして、急に事態は急変した。昭二がある日こんな話を持ちかけら

れたというのだ。
それは、国の役人からだった。
「昭二さん。ちょっとお時間いいですか。」
それに昭二は返事をした。
「実は、ヒムラで、人間を製造するための機械を作ろうとしているんです。」
役人が話したことに昭二は驚いた。
「一体・・・」
昭二は科学の進歩かと思ったが、役人はさらに言った。
「もしかすると、昭二さんが思っていることと違うと思いますので、それの設計図をお渡しします。」
そして、昭二に設計図が渡されて、それを見た。そこにはなぜか人間が入るところがあった。
「これは・・・。」
それを言おうとした時、役人はもういなくなっていた。

第２３話　噂にゆりうごかされ・・・

そして、カスパの町の中では、ある少年が捕まって、この機械に入れられることが噂になっていた。
そういう情報はスバルたちの耳に入っていた。そして、昭二にあることを話そうとした。
夕食のとき、スバルは昭二に話しかけた。
「実は、私たちは、一人の少年とはぐれてしまったんです。」
それに昭二は驚いた。昭二は聞いた。
「それで、町で噂になっている少年を助け出したいというのか。」
昭二は分かっていた。機械に入れられるのはその少年だということを。
「分かった。君たちが会いたい少年かは分からないが、きっと助け出そう。こんなことはあってはならん。」
昭二は、次の日、あの役人のところへ行った。
「参加させてください。」
その言葉に役人は喜んだ。昭二は、国の中で優秀なのだ。
そして、役人は言った。
「では、案内を自宅に送付します。それをご覧になってからお越しください。」

順平も町の噂を聞いていた。そして、警察の前で、ひそかに黒いバンに忍び込んだ。
なぜか、バンには大きな箱があった。多分、捜査用に使うのだろう。
順平はその中に隠れていたのだ。
バンは、砂漠地帯を通り、隣の町、ヒムラに着いた。そして、熱斗は研究施設の地下室に放りこまれた。
地下室にはもう一人、少女がいた。熱斗は声をかけた。
「やあ。」

それに少女は返事ひとつ返さなかった。
熱斗は退屈な時間をすごした。なんと、食事もでないのである。しかも、少女はぜんぜん反応しなかった。そして、いつのまにか夜になっていた。熱斗はやることがないので、寝ることにした。コンクリートの床の上に無理矢理寝た。コンクリートの床は冷たいが、布団などいいものはなかった。
熱斗は夢の中で見知らぬ少女と出会った。あの少女ではない。見たことのないような少女だった。

第２４話　熱斗救出大作戦

スバルたちは研究所の前にいた。そして、門の前に怪しい少年がいた。
スバルは聞いた。それに少年は驚いた。
その少年とは、良平だった。
「僕は、熱斗を助けに来たんだ。」
それにスバルたちは驚いた。
「僕たちもだよ。いい方法があるんだ。一緒にてつだってくれないか。」
そして、スバルたちは仲間を増やして、研究所に入った。入ったところで、警備員に捕まった。
「君たちは、何の用事でここに来たんだ。」
それに先に行っていた昭二が警備員に言った。
「私の助手で、ぜひともこの研究に参加したいと言って来たんだ。」
「しかし。」
警備員が困っているところに、この研究所の所長らしき人物が現れてこう言った。
「いいじゃないか。こんな経験は若い助手には経験できない。是非とも参加して、学んでいってくれ。昭二さんの助手なんて、とても優秀なんだろうな・・・。」
そして、スバルたちはゲートを通り抜けた。人気のないところに行くと昭二が言った。
「よく、通れたな。」
「いや、昭二さんのおかげですよ。」
スバルはそう言った。
そして、昭二は、熱斗にいる控え室へと連れて行った。
「ここに少年はいる。」
そして、ドアを開けた。

「誰よ。」
そこには白衣をきた美女が立っていた。
そしてスバルはそばにいた熱斗に言った。
「熱斗なんか、美女に鼻の下でも伸ばしてろ。」
スバルはその場から逃げ去ってしまった。
「ごめんな。熱斗。さあ、逃げよう。」
そして、おいていかれた上里先生たちは熱斗と一緒に逃げた。
「待て。」
警備員は、４人を追いかけた。しかし、研究所を飛び出して、しばらく走っていると警備員はいなくなった。
町の検問を通り越して、砂漠地帯を歩いていった。そして、砂漠のど真ん中にオアシスが見えた。
「もしかするとスバルはあそこにいるかもしれない。」
昭二はそう言った。

第２５話　オアシスで

そして、オアシスに来ると確かにスバルは木陰の後ろにいた。
熱斗は急いでスバルの前へ行った。そして、頭を下げて言った。
「さっきはありがとう。」
しかし、スバルは下を向いたままだった。その状態が何分か続いていた。
後ろでは、昭二と上里先生が話していた。
「・・・ほんと、男なら一度は通る道なんだけどな。」
「上里さん。」
昭二は、上里先生を静かにさせた。そして、やっとスバルは口を開いた。
「いつから熱斗はそうなったんだ。前の熱斗のほうが好きだった。」
それに熱斗は困った。自分ではそう思っていなかった。
上里先生はついにスバルに怒った。
「別に、いいじゃん。男なら通る道なんだよ。ねえスバル。」
それにスバルは言った。
「確かにそうかもしれない。しかし、熱斗だけにはなってほしくなかった。熱斗は、素直だからいいんだ。でも、なんだかだんだん素直さが無くなっていっているようにしか見えないんだ。」
熱斗はスバルの言葉に何かを感じた。それは何か忘れていたものかもしれない。でもその正体は謎のままだった。
＜自分は何かが変わってしまったんだ。＞
熱斗の心の中をその言葉が飛び交った。
「スバルもいい加減にしないか。お前の気持ちだって分かるが・・・」
上里先生が言ったが、熱斗が上里先生を止めた。そして、スバルに言った。
「たしかに、何かおかしかったかもしれない。でも、俺にはわから

ないんだ。どこが変わってしまったのか。」
それにスバルは言った。
「もしかすると、僕もおかしかったかもしれない。ごめん、こんな迷惑をかけて。上里先生も。」
それに上里先生は謝りたかった。上里先生も自分で言いすぎたと思ったのだ。
「さあ、見つからないうちにどこかへ行かなければ。」
昭二が言った時、砂漠の中に少女が立っていた。
「あの子は、研究所の。」
熱斗は驚いた口調で言った。

第２６話　平和主義国？

「さっきはありがとう。助けてくれて。」
少女はスバルに言った。そして、少女は熱斗のほうを向いてこう言った。
「よかったわ。ほんとうに、あなたって、運がいいのね。」
それに熱斗は困った。別に運がいいわけではない。多分、こんなにいろいろなところでいろいろな相手と戦わなくてはいけないことが運がいいことなのだろうか。
そして、少女はあるところへと姿を消した。
スバルたちも、体制を整え、砂漠を歩き始めた。
二時間後、あの砂漠を越えた。
「ここは、もう他の国だ。たぶんあいつらも追いかけてはこれないだろう。」
昭二はそう言った。
「しかし、なぜ国境がないんですか。」
スバルは変な質問をした。たしかに国境には壁だの軍隊だのがいる。しかし、今通ってきた道には軍隊などは一人もいなかった。
「それは、この国との貿易を事実上認めているからだよ。それに、この国は、平和主義国で、最低限の防衛しかしていないんだ。」
昭二は言った。
「平和主義国？」
スバルはすこし疑問に思った。前、昭二は地球上すべてで戦争が起こっているといった。当然、戦争を起こしたのは各国のはずである。その疑問を持ったまま、ムラヤの都市に入った。
ムラヤの町は今まで見てきた都市よりも大きかった。
町を歩いていると昭二は言った。
「これからどうするか。」
それに皆、何も思いつかなかった。そして、昭二は言った。

「じゃあ、わしの知り合いの研究所にお世話になるか。」
「そうしますか。」
梅園先生はそれに賛成した。どちらにしろ、今日はこの町に泊まらなければならない。
そして、町のはずれにある研究所についた。
「やあ、久しぶり。」
昭二に研究所から出てきた知人はこういった。
「ああ。今日はここに泊めてもらえないか。」
「ああ。いいが。」
スバルたちは何とか宿を獲得したのだった。

第27話　平和な国へ

そして、知人は昭二に聞いた。
「まさか、研究所からまさか助け出したんじゃないだろうな。」
それに昭二はうなずいた。
「参ったことをしたもんだな。たしかに、人をあそこまでやるのはどうかと思うが、それよりもお前の名誉のほうが大切なのではないのか。」
「いや。そんなことはない。今、あの国は滅びかけている。戦争をしてなにがいいんだ。あのままでは国はどんどんやせ細ってしまうじゃないか。」
「しかし・・・」
食事を取っていたのに、その話でもちっきりになっていた。二人の研究者の考えは真っ二つに分かれていた。

そのころ、イオ国では、大変な大騒ぎになっていた。
国王の部下は言った。
「どうやら、昭二たちはザイ国に逃げたようです。」
「そうか。では、攻撃をはじめるとするか。」
「ちょっと待ってください。国王様。」
国王の発言に部下が待ったをかけた。
「そんな戦力を出すほどの兵力はありません。」
「そんなことはない。同盟を結んだ国に連絡しろ。」
部下は国王の前では無力だった。
何を言っても、最近は無理やり押し通された。
「最近の国王はどうしたものだろうか。」
廊下で、部下はため息をついた。今のイオ国では、表向きは国王に忠誠心を誓いつつも、裏ではこんな状況なのである。

そんなことを知ってか、知らぬかわからないが、知人はこんなことを言い始めた。
「ある商人から聞いたのだが、どうやら、今、イオ国は体力を消耗しているそうだ。そして、人々は、国王への忠誠心などがなくなっているそうだ。」
その情報に昭二は言った。
「そうか。ありがとう。」
知人はさらに付け加えた。
「しょうがない。応援してやる。ほしいものがあれば、言ってくれればよい。」
そして、大きな部屋に熱斗たちを集めた。
昭二は言った。
「食事の時に、私の知人は、協力してくれるといった。どうだ、国を再生させないか。平和な国に。」
それに熱斗たちはうなずいた。

第２８話　狂気

次の日、熱斗たちは、ムラヤの町を出て、イオ国に入った。熱斗たちは緊張した。もしかすると、殺されるかもしれない。しかし、自分たちには使命があった。
砂漠を歩いていると、砂漠のど真ん中に人がいた。
「もしかすると軍隊の奴かもしれない。」
昭二は言った。しかし、すぐに軍隊ではないことが分かった。服装が赤いのである。しかも、長袖、長ズボン。まるでサンタクロースのようだった。
近づいてみると、サンタだった。しかし、熱斗たちが想像したあの長いひげのサンタではなく、若いサンタであった。
「どうしたんですか。」
スバルは、そのサンタに聞いた。サンタはこう答えた。
「もうだめなんです。何もかも。子供たちに届けようとしても、子供はどこかへ逃げていて、所在が分からない。さらには、サンタの中には、たまたま戦いに巻き込まれ、死んでいった仲間もいます。それで、私はサンタをやめようと。」
熱斗たちは思った。そんなことはさせられなかった。
どうすれば、よいのだろうか。

そのころ、国王周辺は緊迫していた。
「なに、またここへ戻ってきそうだと。さっさと捕まえろ。軍隊を集めろ。殺してもいい。」
国王はもう大変なまでに狂気になっていた。それを誰も止めることは出来なかった。
部下は指令した。
「はやく。はやく。軍隊を出せ。誰でもいい。早く」
国は、狂気に満ちてしまっていた。

そんなころ、熱斗たちは、サンタにあることを言った。それは、
「地球の戦争は絶対止めて見せます。」と。

第２９話　戦いを胸に

無理やり王に組まれた軍隊たちは、熱斗たちがいると思われる国境付近に配備された。
「怪しい人物を見かけたら、職務質問しろ。」
隊長は、威勢よく隊員に向かっていった。

そのころ、熱斗たちも気づいていた。
「これでは、ここから動けない。どうする。戦うか」
スバルはみんなに聞いた。
「俺とロックマンがクロスフュージョンして、武器を壊していく。その間に、逃げるのはどうだ。」
熱斗はそう言った。しかし、それではまたとらわれの身になって、今度こそ、この世から消えてしまう。それだけは出来なかった。
しかし、熱斗は決断していた。たとえ、ここで死んでもいいと。
スバルたちの判断に熱斗はこう言った。
「俺はいい。それよりも、出来るだけ多くの人を助けることが大事なんだ。俺は、もうここで死んでもいい。」
その言葉についにみんなついに動かされた。
熱斗は、久しぶりにロックマンとクロスフュージョンをした。
「敵がいるぞ。」
兵士の一人は、その姿に唖然となった。
「あれはなんだ。人間と何かが合体しているぞ。」
そして、熱斗は、兵士の武器を狙って攻撃をし始めた。兵士は殺せなかった。兵士だって、無理やりやらされているのである。そのことを思うだけで十分だった。
そのさなか、スバルたちは脱出した。しかし、その行動を見つかってしまった。
「全速力で逃げるぞ。」

梅園先生は、昭二を担いで逃げた。さすが、運動部の顧問だけある。
しかし、良平は、あとすこしのところで兵士に捕まってしまった。
「良平。」
スバルは叫んだ。それに答えるように言った。
「先に逃げて。僕は大丈夫だから。」
「おい生意気な小僧だ。」
良平は兵士に連れて行かれてしまった。
スバルたちは逃げるしかなかった。
そして、ある村に着いた。そこには兵士はいなかった。

第３０話　平和な村

スバルたちは、村の人に聞いた。
「軍隊の人はいませんか。」
それに村民の一人はこう答えた。
「そんな危なっかしいもの入れるわけがない。」
そして、スバルは、村民に事情を話した。
「そうかい。じゃあ、一度長老に会ってみると良い。いろいろと教えてくれるだろう。たぶん、戦っている少年も時期こちらにくるだろう。」
村民の言葉に不思議さを感じながら、スバルたちは、長老の家へ向かった。
長老の家に着き、事情を話すとすぐにあってくれた。
「ようこそ。平和村へ。」
「平和村？」
スバルは思わず聞き返してしまった。平和という名前がつく村は、なかった。しかも漢字表記だ。
「ここは、ある人物が開いた村なのだよ。この村はね、あの王子を嫌がっているんだ。いま、国中の村が壊されている。あの政権によって。隣の国は、平和主義でいいが、こちらは、戦争を仕掛けている。この村は、ちょうど砂漠の真ん中にある山にあるので、結構分かりやすい。あそこを見てみろ。」
後ろに広がる独特の風景。山頂には風車が風を受けて回っている。まるで、別世界だ。どこかのお話に出てきそうだ。そして、老人は続けて言った。
「この地には、争いはないのだよ。そして、逃れた民もこちらへ来る。なぜだかだ。ただ、村も小さくて、収容しきれないから、他の所へ行ってもらっている。すまないが。しかし、今回は特別に泊まっていってよい。何日でも、」

その長老の言葉にスバルは頭を下げた。

その頃、熱斗は、なんとか、兵士との戦いをまるく収めた。
そして、上空で、あの平和村を見つけた。
その時、ロックマンのヒットポイントがなくなってしまった。
「おー。」
熱斗は砂漠へ落ちていった。
「いたたたっ」
熱斗は怪我なしで済んだが、平和村へは歩いていかなければならなかった。まあ、これもこれでいいのだろう。

第３１話　公開死刑

国王は、その頃、捕まった良平をどうするか決めていた。国王は、やはり頭がおかしくなったように言った。
「少年を、公開死刑に処せ。」
「しかし、少年ですよ。国王。」
「そこまでやらなければ、あの少年たちは出てはこない。」
国王の発言に部下たちは困ってしまった。少年を処せば、国民からの反感を買うことは分かっていた。
しかし、部下たちは国王に従った。そして、順平の死刑のための準備が始まった。
まずは、このことを発表することになった。そうすれば、出てくるに違いないと思ったからである。
村では、恒例であるテレビニュースを見る会が開かれていた。村民はテレビによって、情報を得るのである。
熱斗たちも見ていたが、そのうち信じられないものが映りはじめた。それは、良平の画像だった。そして、国王の部下が話をし始めた。
「さあ、反抗勢力よ。もしも、明日までに軍に投降して出てこないのならば、この少年を公開処刑とする。」
その言葉を聴いた熱斗は外へ飛び出した。それをスバルと上里先生は追いかけた。
「おい待て。」
スバルはなんとか熱斗を捕まえた。
「良平を助けに・・・」
熱斗はそう言った。
「やはり、そうなったか。」
長老が出てきた。そして、長老は熱斗に話しかけた。
「いいじゃろう。友を助けに行きなさい。いつでも私たちは味方だ。」

そして、熱斗たちは二手に別れた。まずは、熱斗が先を急いだ。その後を、荷物を持ちながらスバルたちがあるいていくというスタイルだった。そうでなければ間に合うとは思えなかった。
しかし、いくらなんでも、無理があった。この村からはとても離れていた。それを明日に着こうとするには難しいことだった。

その頃、部下たちにそのことが伝えられた。
「よし。これで立役者はそろうことになるな。」
部下は笑みを浮かべた。

第３２話　国王の暴走

熱斗はともかく走った。なにも考えずに。ただ、良平を助けるために。時には休憩や立ち止まったりした。しかし、その時でも、良平のことを考えていた。

一方、国王は、このことを随時聞いていた。それを聞けば聞くほど笑みが増えた。

そして、部下にも。この国では、少年を殺すということを平気で言えるようになってしまったのである。そして、本当に実行に移してしまおうとしていた。

いつもなら国王が演説をする広場には、体を固定するための台が用意された。

「さあ、明日が楽しみだ。」

国王は喜びでなかなか寝付けなかった。そのころ、熱斗も、寝てはいられなかった。まだまだ首都は先であった。

後ろを歩いていたスバルたちは、砂漠の中で寝た。砂が入ってくるが、テントを出すことができないので、しょうがなくここで寝ているのである。

寝静まったころ、後ろに隠れていたスパイが現れた。そして、大きな袋に二人を入れた。しかし、梅園先生を入れるのは大変である。よっぽどの者であることは確かである。

間違いない！！

次の日、熱斗は疲れながらも走った。それにはロックマンも感心した。それとは対照的に、国王は熱斗を殺すことに何かを感じていた。多分、快楽殺人とかいうものなのだろう。しかし、今はだれもその事実に気がついていない。

「ついに、首都が見えた。」

熱斗は、地平線のかなたにある町を見つけた。これが首都のシェルパだ。

そのころ、ちょうどスバルたちも目覚めた。しかし、周りは白かった。そう。布の袋に入れられ、輸送されていたのだ。上里先生も気がついたが、いくら暴れても、それはスバルに被害が及ぶだけだった。

そして、スバルたちを乗せたトラックも首都へだんだんと近づいた。国王は、部下に呼ばれて広場に出た。国王の顔は笑みが絶えなくなっていた。

熱斗は広場へ向かった。

「順平！」

熱斗は広場に入ると同時に叫んだ。しかし、この後思わぬ事態が熱斗たちを待ち受けていた。

第３２話　国王の暴走（後書き）

＝お知らせ＝

現在、とても多忙なため、更新を不定期に行っています。ご迷惑をおかけします。

第３３話　急展開　そして

国王は言った。
「ようこそ。君は、ここで死んでもらう。」
それと同時に、一斉に周りの人たちが襲ってきた。
しかし、周りの人の行動は不可思議だった。
まるで、心を持っていないようだった。しかし、そんなことを考えている暇はなかった。
熱斗はたちまち捕まってしまった。
「さて、仲間と死んだほうがいいかな。どうせなら。」
そして、スバルたちが袋から出された。
「スバル。」
熱斗は叫んだ。しかし、スバルは気を失っていた。
「さっき、すこし暴れたもんで、やっといたのさ。」
国王は冷たく言った。
それに熱斗は地団太踏んだ。熱斗は、手首をうまく動かしながら、ＰＥＴにチップを入れようとした。
それに気がついていないのか、国王は部下にこう指示した。
「どうせなら、槍でさすんでなく、火の中でうなってもらおうじゃないか。」
そして、熱斗たちのまわりを火が取り囲み始めた。
熱斗は、なんとかうまくチップをＰＥＴに入れることができた。
そして、熱斗は、ロックマンとクロスフージョンしたのだった。
「なんだ、あれは。」
国王の指先には、熱斗とロックマンがいた。
国王は、おびえながら、部下に銃を撃たせた。しかし、簡単によけられてしまった。
熱斗は、よけながら、攻撃をした。そして、兵士の中から逃げ出すものが出てきた。

「ちょっと待て。」
国王は声をかけたが、兵士たちはすべて逃げてしまった。
「くそ。」
国王はそんなことを言っていたとき、ある部下が言った。
「どうやら、町を取り囲むように、国民とザイ国の群集がいる模様で、こちらに攻めてくるようです。」
それに国王は焦って逃げ始めた。しかし、国王はすぐに捕まってしまった。
ザイ国の兵士は言った。
「大丈夫だったか。少年たち。」
それに熱斗はうなずいた。
「それはよかった。この国が戦争をもうしないことになったんだよ。君たちが勇敢な行動をしてくれたおかげで。ありがとう。」
そして、それを見つめる男がいた。

第３４話　良平の死

その騒ぎが始まる前に、熱斗たちは町を出た。スバルたちも、国王が出て行く前に、やっと気がもどり、なんとか怪我をしなくてすんだのである。
良平は言った。
「これからどうするんだい。」
それに熱斗は答えた。
「まだ分からない。」
良平は納得したような顔をした。
その時、良平は急に顔色を変え、うなり始めた。
「大丈夫か。」
熱斗たちが言った。しかし、その時には、砂漠に血を吐いていた。
「誰か医者を呼ばないと。」
「その必要はない。」
良平はかすかに言っていた。
「平和にしてくれてありがとう。そして、君たちにありがとう。最後は楽しい人生だった。君たちと出会って・・・。」
良平は言い終える前に息を引き取った。
「良平！」
熱斗たちは良平の体をゆすったが、まったく反応しなかった。熱斗はそこに老人がいることに気づいた。そして、老人はこういった。
「人には最後というものがある。それは、つまらない人生だったりするときもある。しかし、良平はいい顔をしながら行ってしまった。これほど贅沢なことはない。」
「じゃあ、なんで、良平が・・・。」
「それは運命だからだ。熱斗。お前がロックマンと会ったのも運命なんだ。熱斗の心情は今は不安定であることは十分承知だ。しかし、これを変える事はできないんだ。」

熱斗は、自分の姿が分からなくなっていた。

あれっ。ここは・・・。

そこは、森の中だった。

「熱斗！！」

向こうからメイルが来た。そして、熱斗に抱きつく。

「どこ行ってたの。心配してたのだから・・・。」

そして、また物語は始まるのであった。

第３５話　タイムモンスターの逆襲

そのころ、秋原町。

「また、タイムモンスターが出現しました。」
科学省では、こんなことが日常茶飯事になっていた。

そして、ある日。貴船長官が祐一郎を呼んだ。
貴船長官は、そして、こんなことを話し始めた。
「光博士。このままでは、他のクロスフュージョンメンバーのシンクロ率が下がってしまいます。何か、いい機械を開発しなければ、秋原町は、完全にタイムモンスターの支配下になってしまう。」

祐一郎は、その話にピンときた。
「それでは、タイムモンスターと対戦できるロボットを作りましょう。」
「そんなことが可能なのですか、光博士。」
貴船長官は、祐一郎に聞き返した。
「まだ、分かりません。しかし、それしか方法はないのでしょうか？」
それに、貴船長官は返す言葉もなかった。

そして、開発をし始めたのだった。

ロボットとはいえ、タイムモンスターを倒すのは容易ではない。
そこで、ロボットには、電波妨害できる機能や、電波内をサーチする機能など、開発は、多岐に及んだ。

それから、数週間後。

「やっと完成しました。」
貴船長官の所に祐一郎が現れた。
そこには、大きなロボットがいた。
「これで倒せるのでしょうか。」
貴船長官は疑問に思った。
しかし、祐一郎の説明に貴船長官はだんだんと確信していった。

そして、タイムモンスターを退治するために、出動をした。
その名も「モンスターキャッチャー」。

そして、モンスターキャッチャーは次々とタイムモンスターを倒していったのである。
タイムモンスターたちは、次の日に会合を開いた。
「どうするんだ。あのロボットを倒せなければ、俺たちの侵略作戦は失敗に終わる。」
そんな意見が飛び出た。
それに、キングモンはこう言った。
「では、ウイルスとやらで、ロボットを服従させてはどうだろうか？」
それに、タイムモンスターたちは賛成した。
タイムモンスターたちにとっては、一刻も早く退治したかったのである。

第３６話　炎山ｖｓ．ウイルス

そして、ウイルスが開発された。
「これを送れば、プログラムに寄生し、プログラムは変化してしまうのだ。」
開発者のタイム怪物はそう言った。
その説明にキングモンは微笑みを浮かべた。

次の日、密かにそのプログラムはモンスターキャッチャーに送られた。そして、ウイルスは、モンスターキャッチャーへ吸い込まれたのだ。
モンスターキャッチャーは、何事もなかったように動き始めた。しかし、暴走は始まっていたのだ。

「キャー」
秋原町で、その悲鳴を聞いた人から科学省へ通報があったのは、それからすぐのことだった。
そして、名人は、熱斗たちを呼び出そうとした。しかし、そこには熱斗はいない。
急いで、名人は、炎山を派遣した。

「ブルース、クロスフュージョンだ。」
炎山は、現場に到着すると、そこには巨大な物体が暴走をしていた。
そして、ブルースとクロスフュージョンをした。

相手は、タイムモンスターを倒すために作られたものだ。
相手は、なかなか強い。

しかし、なんとか炎山とブルースはそのプログラムを倒すことがで

きた。
やはり、熱斗よりも力がある。
そして、この結果はすぐにタイムモンスターたちの耳に届いた。
「このままでは、まずい。」
「それでは、光熱斗たちを殺害してしまえ。」
このような話しが次々と現れ、緊急に召集されたタイムモンスターたちは混乱していた。
そして、タイムモンスターたちは、キングモンのいうことを聞かなくなっていった。
しまいには、タイムモンスターを全員集結して、このモンスター闘技場で、最後の戦いをすることとしたのであった。
タイムモンスターたちは、その戦いに命を懸けたのである。

第37話　罠

そのころ、熱斗たちをある場所から観察している一人の少女がいた。
その少女は、天空の城で、召使(めしつかい)いたちを呼んでこう言った。
「あの少年・少女たちに危機が迫っています。私たちは、あの少年・少女たちを、そして、地球を救わなければならないと思うのですが、あなたたちの意見を聞きたい。」
それに、一人の召使(めしつかい)いはこう言った。
「たしかに、地球はこのまま行くと、タイムモンスターたちの手によって、支配されるでしょう。しかし、時空管理局がそこまで手を出すことはないでしょう。」
しかし、それを少女は受け入れなかった。

そして、少女はこう言った。
「私、時空(ときそら)　明海(あけみ)の名で、時空管理局が、少年たちを助けることを宣言する。」
それは、小さな時空(ときぞら)にとっては、重大で、しかし、少女にとっては、当たり前の結論を出した。

熱斗たちはそんなことも知らずに、次の街へと向かっていた。
そして、その町では、タイムモンスターによってあることをされていた。

「何をするんだ。」
町の住人は、町にある刑務所の中に次々と押し込まれていった。
町の住人をよそに、タイムモンスターたちは、新たに開発した装置を動かしていた。
その装置とは、擬人発生装置だった。
その仕組みは分からない。ただ、ある町の住人は、黒い物体を機械

に入れているのだけは目撃してしまった。
その黒い物体は生きていたという。

そんなことは熱斗たちには分からない。
熱斗たちは、いつの間にか、タイムモンスターのわなにかかってい
ってしまったのである。

「こんばんわ。」
夜、熱斗たちは、町についた。町にはいろいろなところで、擬人た
ちが料理を作ったりしている。まるで、本物の町のようだった。

熱斗たちは、ある町の擬人に話しかけた。
「すいませんが、今日、この町に泊まりたいのですが・・・。」
それに、擬人は、こう答えた。
「ああ、いいですよ。」
なぜかあっさりとＯＫが出たのかを少し気にしつつ、熱斗たちは、
擬人の家へと案内されていった。

第３７話　罠（後書き）

更新が超不定期になっております。大変ご迷惑をおかけいたします。

第３８話　罠に引っかかった熱斗たち

そして、熱斗たちは、疲れのためか、とても眠かった。
夕食を食べた後、睡魔に負けて、ついにその場に倒れてしまった。
擬人は、熱斗たちが熟睡しているのを見計らうと、すぐに他の擬人たちを集めた。
「よくやった。」
タイムモンスターであるヒューモンは、こう擬人たちに言った。
タイムモンスターは、擬人たちに熱斗たちをある場所へと運ばせた。
それは、その町の地下にある牢屋だった。
熱斗たちが目をさますと、牢屋の前の見張りが声を上げた。
「獲物がおきたぞ。」
熱斗たちは、周りの風景の激変に驚いた。
「一体、ここは。」
それに、看守はこういった。
「ここは、お前たちの墓場だ。」
「なんだと。」
熱斗たちは、焦った。まさか、タイムモンスターにつかまってしまうとは・・・。
しかし、看守はこう話した。
「しかし、お前たちにはいい条件を与えてやる。ひとつは、お前らを開放する代わり、人間たちは俺たちに従う。」
「もうひとつは」
熱斗たちは息を呑んで聞いた。

「お前たちが自力でこの牢屋をでるかだ。」
それに、熱斗はこう答えた。
「お前たちを倒すのみだ。」
「なんだとよ。ふざけるな、このやろうめが。」
「おい、大佐、そんなに血が上ると・・・。」
そして、いきなり、大佐が倒れこんだ。
「大丈夫なんですか。」
スバルが、タイムモンスターに聞いた。
「いやあ、血が上ると、こうなるんですよね。」
大佐は意識不明のまんまだったが、周りのタイムモンスターは血が冷たかった・・・。
そして、他のタイムモンスターは言った。
「では、会場を準備させてもらいます。」
「えっ？」
熱斗たちは疑問を感じた。
「いや、僕を信じてください。この目を見つめて・・・。」
「お前は、何モンだ？」
その場の空気はおかしくなっていた。

第３９話　謎の少女

「おい、出ろ！！」
あの倒れた大佐が熱斗たちに指示をした。
そして、大佐は、とある場所へと誘導した。
その場所は暗かった。しかし、先の扉を開くと、そこには、広大なスタジアムが広がっていたのである。
「さあ、ここが、対決場所だ。そして、お前たちは、ナビと一緒にデリートされるのだ。」
大佐の不気味な笑い声が続いて、会場を包んだ。
熱斗たちには、ここで戦う道しかなかった。
熱斗やスバルたちは、クロスフュージョンをした。そして、コロシアムの中央からなにやら不気味なモンスターが出てきた。
「さあ、クローンデリーモンよ。やっつけてしまえ。」
そして、モンスターが熱斗たちの前で暴れ始めた。
モンスターが出した技は凄いものだった。なんと、スタジアムが歪んだのである。
「ははっ。これはなあ、お前たちを一瞬でデリートできりものなんだぞ。精々、あの技に当たらないように逃げるのだな。」
その時、いきなり、空がにわかに明るくなった。
「いったい何だ！」
「ふふふ。私は、時空警察のものだ。」
「時空警察だと。」
大佐が少女に言った。
「そうだ、世界、いや、時空間を乱す者を処罰するためにつくられたものだ」
「そんなの知らねえよ。」
「それでも、あなたを処罰しなければならない。」
そう言って、宙に浮いている少女はある呪文を唱え始めた。

「うあああー」
大佐になにが起きたのだろうか、いきなり苦しみ始めた。
そして、あたり一瞬光に包まれたと思うと、いつの間にか少女一人になっていた。
大佐やそのほかのモンスターはどこかへ消えていた。
「大丈夫ですか。」
少女は熱斗たちに声をかけてきた。
「ああ。君は一体…。」
「２３ＸＸ年から来た、時空警察よ。」
少女はそう答えたのだった。

第３９話　謎の少女（後書き）

久しぶりです。久々に作ってみました。

第４０話　突然の別れ

「あなたたちにも、大変、残念なお話があります。」
少女は、そう熱斗たちに言った。
「話って、なに？」
熱斗がそう訊いた。
「はい。あなた達の活躍によって、世界が助けられたのは、私たちも承知しています。しかし、これ以上、あなた達を活動させるわけにはいかなくなりました。」
「どうして。」
「それは、時空を超えることによって、その文化を変えてしまうかもしれないからです。」
そう言われた熱斗たちは、納得した。
そう。時空を超えることは、そのような危険性をはらんでいるのである。
「では、それぞれの時空間に戻ってもらっていいですね。」
少女はそう言った。
「ということは、スバルたちと別れるということですか。」
少女はうなづいた。
熱斗たちに、衝撃が走った。
今まで、苦楽を共にした友である。いきなりの別れは、正直、つらかった。
「すいません。時間を少しください。」
スバルは、そう言って、少女に時間をもらった。
「いいですよ。少しなら。」

そして、メンバーが集まった。
「こう、いられるのも、あと少しだな…。」
「ああ。ありがとう、熱斗君。」

「いやいや。スバルだって、いろいろと活躍してもらったじゃないか。」
そう熱斗は言った。
他の仲間も、お互い、最後の談笑をした。

「すいません。そろそろいいですか。」
少女はそう熱斗たちに言った。
「わかりました。」
スバルがそう答えた。

「じゃあな、熱斗。ロックマン。」
「じゃあな、スバル、ウオーロック。」
お互い、最後にそう言った。

「それでは、あなた達を元の時空間に戻します。」
少女がそういうと、すぐに目の前が強い光に包まれた。

「熱斗君、学校、行かなくていいの？」
「うおー、遅刻する！！」
いつものように熱斗は、学校を遅刻しそうになった。
パンを片手にもって、急いで学校に向かった。
「おはよう。熱斗」
メイルちゃんがあいさつをしてくれた。
熱斗たちは平和だった。
それは、スバルたちもだった。
しかし、このメンバーはいつかあえるかもしれない。

それは、時空警察内で起こっていた。
「長官！」

「なんだい、雪野くん。」
あの熱斗たちを元の世界に戻した少女が長官に言った。
「これ。」
「ああ、ありがとう。」
長官渡したそれにはこう書かれていた。

『時空警察協力者候補リスト』
「最近も、まだまだ、時空間を越えた犯罪が多いからね。少しでも協力してもらえるとうれしいからね。」
そう長官言った。

そのリストの中には熱斗たちの名前が入っていた。

しかし、いつ頼むかは、まだ決まってない。
また、いつか、活躍することがあるだろう。

第４０話　突然の別れ（後書き）

いままで読んでいただきありがとうございました。

また、いつか、ロックマンエグゼの小説が発表できるときまで、お別れとなります。

なお、最近は、ハヤテのごとくの小説をそちらもどうぞ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0388c/

ロックマンエグゼTR

2010年10月10日12時51分発行